

## 論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Inability of infants to push up in the prone position and subsequent development

和文タイトル: 腹臥位で胸部を挙上できない6か月児の発達に関する検討.環境省「子どもの健康と環境に関する全国調査」産業医科大学サブユニットセンターデータから.

ユニットセンター(UC)等名: 福岡UC  
サブユニットセンター(SUC)名: 産業医科大学SUC

発表雑誌名: Pediatrics International

年: 2018 月: 9 巻: 60 頁: 811-819

筆頭著者名: 千手絢子

所属UC名: 福岡UC

目的:

生後6か月時に両上肢で胸部を床から挙上する腹臥位姿勢をとれない児がいるが、このような運動発達の偏りを呈する正常産児の発達の特徴は明らかにされていない。この特徴をもつ児の3歳までの発達経過を明らかにする。

方法:

産業医科大学サブユニットセンターで収集した質問票調査暫定データを使用し、正常産で出生した2020名を対象とした。6か月時Ages and Stages Questionnaire(ASQ-3)に、両上肢で胸部を床から挙上する腹臥位姿勢が「できる」と回答した群と「できない」と回答した群に分け、6か月、1歳、1.5歳、2歳、2.5歳、3歳時のASQ-3スコアを2群間で比較した。

結果:

両上肢で胸部を床から挙上する腹臥位姿勢が「できる」群は1625名、「できない」群は172名で、「ときどき」と回答した212名は除外した。粗大運動領域における2群間のスコアの有意差は6か月から3歳時まで持続した。6か月時、言語、微細運動、問題解決能力、社会性の各領域においても2群間で有意差が認められ、それぞれ1歳、2歳、2歳、1.5歳まで持続した。

考察:(研究の限界を含める)

生後6か月児が両上肢で胸部を床から挙上する腹臥位姿勢は、抗重力運動獲得の一指標である。この姿勢の獲得の遅れが粗大運動以外の発達領域に影響する機序は明らかではないが、この姿勢が、乳児が最初に獲得する、自発的に周囲を水平に見渡すことができる姿勢であることは一因かもしれない。この姿勢の獲得が遅れた児の粗大運動以外の領域における発達の相対的な遅れは、1歳以降軽減し2歳頃までに消失するが、程度が顕著な例や遷延する例では早期介入を考慮してもよいかもしれない。研究の限界は、相対的な遅れが必ずしも絶対的な発達遅滞とは限らないこと、質問紙データのみを利用したため児の詳細な理学所見の情報がないこと、である。

結論:

6か月時に両上肢で胸部を床から挙上する腹臥位姿勢ができない児では、幼児期早期の発達が相対的に遅れることが示唆された。遅れは粗大運動以外の領域では2歳頃までに消失したが、粗大運動領域では3歳時も持続した。遅れは複数の領域にわたるため経過観察がのぞましく、顕著な場合や遷延する場合は介入も考慮するとよい。